

息子としての執事

——『日の名残り』における父子関係についての考察

肖軼群

はじめに

カズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) の長編作品第三作『日の名残り』(*The Remains of the Day*, 1989)¹を巡っては、「信頼できない語り手」(unreliable narrator)を中心課題とした先行研究により、主人公スティーブンス (Stevens) の主観による欺瞞のプロセスが明らかにされつつある。しかし、スティーブンスの語り中存在する歪みは、すべて彼の独自の考えによる創造物とは言えない。むしろ彼の既存観念や生い立ちなど、彼自身が左右しえない要素は、姿を隠しつつ絶えず彼の語りに影響を及ぼしていると考えられる。イシグロ本人が度々強調してきたように²、スティーブンスの住んでいる世界は極端に狭いものであり、外部からの影響も相対的に弱いものである。使用人の世界から出たことのないスティーブンスは、ある意味で純粋な思想の持ち主であり、その思想の重要かつ数少ない源として父・老スティーブンス (Stevens Senior) が挙げられる。老スティーブンスの人物像に関する考察は、スティーブンスを分析する上で重要な手掛かりになるとと思われる。

これまでのイシグロ作品に登場する「父」のテーマをめぐる研究としては、例えば『充たされざる者』(*The Unconsoled*, 1995) の父子関係を取り上げ、子供時代の家族愛の不在について扱った武富利亜の論考がある。また、A. Ionescu は日本を舞台にした『遠い山並みの光』(*A Pale View of Hills*, 1982) と『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*, 1986) を取り上げて、終戦後に崩壊した「父たる国家」と無力な父親のイメージとの共通性を説いた。『日の名残り』の研究に視点を移すと、スティーブンス親子の類似性についての断片的な言及は見かけられるものの (Shaffer 74; Wong 60)、テキストに基づいた父子関係についての考察がまだ十分に行われていない。本稿は、『日の名残り』の「父」のテーマに焦点を絞り、「父」を主軸としたスティーブンスの語りを分析する。語り手と「父」との間の無意識的な相互関係を明らかにすることによって、親子関係・家庭的な視点から『日の名残り』の読みの新たな可能性を提示する。

1. 「父」への崇拜

Barry Lewis はイシグロの長編前四作の特徴として、「父親の不在」(‘absent fathers’)(Lewis 117) を挙げた。実際に父親の権威が崩れ、大人になった子供が父に反逆するという構図は、『遠い山並みの光』と『浮世の画家』から明確に読み取られる。『日の名残り』では、主人公と父親の間にある「交流の不在」は否定できないものの、それに対して父親はステューブンスの人生において大きな存在感を放っていると考えられる。この存在感を判明する最も明確な手がかりは、主人公ステューブンスが父親に抱く崇拜の感情であろう。以下、ステューブンスの語り方と口調の使い分けについての考察を通してこの崇拜の感情を明確にする。

『遠い山並みの光』と『浮世の画家』に登場するような、子供の前で威厳を失った父親たちと異なり、ステューブンスの回想の中の父親はいつまでも偉大な存在である。父を高く評価する点において、どちらかという和前の二作の主人公たちと異なる態度をとっている。ただし、父を直接に褒め称えることは「感情の抑制」という執事の信条に反するため、ステューブンスは他の表現の仕方を考案するしかない。その結果、「偉大さ」と「品格」の内容を最初に説明する際、ステューブンスは彼が思いついた偉大な執事の名前を挙げたものの、その執事たちのエピソードについて何も示さない。‘You will not dispute’ (34) から始まる文章で常識のように提示された Mr. Marshall や Mr. Lane より、読者により強い印象を与えたのは、むしろ老ステューブンスの方ではないか。Mr. Marshall などの執事の偉大さの自明性について、‘If you have ever had the privilege of meeting such men, you will no doubt know of the quality they possess to which I refer.’ (29) とステューブンスは述べるが、実際に彼は読者からそのような‘privilege’を奪い、代わりに父に関するエピソードを三つも挙げる。真正面から父の偉大さを謳うのではなく、抽象的で実体のない偉大な人物の名を挙げながら父親に多くの紙幅を割り当て、読者の目を父の偉大さに誘導したのは、ステューブンスの語りの巧妙さの表れである。

ステューブンスの父への崇拜は、父と話していた時の彼の口調からも読み取れる。作品中にステューブンス父子の会話は二箇所しか表れないが、その際にステューブンスが使った表現から父に対する彼の感情が汲み取られる。

‘I have come here to relate something to you, Father.’

‘Then relate it briefly and concisely. I haven’t all morning to listen to you chatter.’

‘In that case, Father, I will come straight to the point.’

‘Come to the point then and be done with it. Some of us have work to be getting

on with.’

‘Very well. Since you wish me to be brief, I will do my best to comply. The fact is, Father has become increasingly infirm. So much so that even the duties of an under-butler are now beyond his capabilities. His lordship is of the view, as indeed I am myself, that while Father is allowed to continue with his present round of duties, he represents an ever-present threat to the smooth running of this household, and in particular to next week’s important international gathering.’ (68, 下線は筆者)

老スティーブンスが客人の前で転倒し、失態を晒した出来事から生まれたこの発話の中に、代名詞の変化が見られる。スティーブンスは最初は‘you’を使ったが、仕事の話に入った途端に‘he’に切り替えている。目の前にいる父と直接会話しているところで三人称代名詞を使うことにより、スティーブンスはこの発話で父との距離を引き離しているのである。スティーブンスの中には生身の父の他に仕事の世界にいる執事としての「父」が存在し、二つの父に対して彼がそれぞれ異なる態度をとる傾向が見られる。‘you’から‘he’への変化はまた、父の仕事能力が下がった事実を認めるのをできるだけ避けたいというスティーブンスの気持ちを表していると考えられる。下線部の‘he’を‘you’に変えると、目の前にいる父の仕事を否定することとなり、それによって自分が目標としていた完璧な執事としての父のイメージを壊すことになる。‘he’を使うことは、父の衰えを認めざるを得ない状況の中で崇拝する「父」のイメージを保つ努力の一環である。スティーブンスには高圧的な父親に対して‘you’を使って批判する勇気がなかったという解釈（武富 7）も成り立つが、「偉大な執事」としての父のイメージを現実侵食されたくないというスティーブンスの願望も含まれているのではないか。‘you’と‘he’の使い分けから伺われるのは、二つの父へのスティーブンスの二つの顔——即ち「息子としての顔」と「偉大な執事に対する顔」の存在である。

老スティーブンスが亡くなる直前の場面も、この二つの顔の存在を示している。

On that occasion, too, my father was sleeping when I entered. But the chambermaid Miss Kenton had left in attendance stood up upon seeing me and began to shake my father’s shoulder.

‘Foolish girl!’ I exclaimed. ‘What do you think you are doing?’

‘Mr Stevens said to wake him if you returned, sir.’

‘Let him sleep. It’s exhaustion that’s made him ill.’

‘He said I had to, sir,’ the girl said, and again shook my father’s shoulder.

My father opened his eyes, turned his head a little on the pillow, and looked at me.

‘I hope Father is feeling better now,’ I said. (100-01)

老スティーブンスの目覚めを境目に、スティーブンスの口調が大きく変化する。感情的な‘Foolish’や、父への心配を表した‘Let him sleep’などの表現を使うスティーブンスは、一人の執事というより、むしろ父の容態を案ずる子どもの方に近い。しかし老スティーブンスの視線を感じると、すぐさまに業務連絡のような口調に切り替えている。これ以降の会話では、‘I hope Father is feeling better now’の一文が、‘I’m very glad Father is feeling better’や‘I’m glad Father is feeling so much better’のように少し変形されながらも、五回も繰り返される。このロボットのような返答は、老スティーブンスが感情を剥き出しにする場面に当たって極めて不自然である。スティーブンスが父の突然の感情に対応できなかったのは、執事としての自分と息子としての自分との共存ができなかったからである。

ここまでの段階では、スティーブンスの父への尊敬は読み取れるものの、この感情は崇拜とは呼び難い。ここであえて「崇拜」という表現を使ったのは、スティーブンスの感情には客観的事実からの乖離、そしてこの感情を他者に認めさせたいという願望が含まれているためである。部下の老スティーブンスを呼び捨てにしていたミス・ケントンに対し、スティーブンスは苗字で呼ぶようにと彼女に要請する。その後二人の会話が次のように続く。

‘Mr Stevens, I may not have been a housekeeper for long, but I would say that in the time I have been, my abilities have attracted some very generous remarks.’

‘I do not doubt your competence for one moment, Miss Kenton. But a hundred things should have indicated to you that my father is a figure of unusual distinction from whom you may learn a wealth of things were you prepared to be more observant.’

‘I am most indebted to you for your advice, Mr Stevens. So do please tell me, just what marvellous things might I learn from observing your father?’

‘I would have thought it obvious to anyone with eyes, Miss Kenton.’ (56)

引用部分には、父への崇拜の二つの構成要素が含まれている。老スティーブンスの偉大さへの絶対的自信と、客観的事実の無視である。ダーリントン邸に来た時の

老スティーブンスはすでに高齢であり、その仕事能力も精力も大いに衰退した。それでもミス・ケントンに向かって父の偉大さを説くスティーブンスは、父親の実際の働きぶりを無視し、自分の中の偉大な父だけを見ている。この事件の後にミス・ケントンに老スティーブンスの過失を突き付けられた時でさえ、スティーブンスは父の間違いを半ば認めたとはいえ、決して自分の目でそれを確かめようとしなかった。³父の偉大さを他人に押し付け、父のミスから視線を逸らすことによって「父」の完璧なイメージを守ろうとしたスティーブンスは、「偉大な父」の崇拝者、あるいは盲信者とも言える。

スティーブンスを盲目たらしめた崇拝の感情は、やがて望ましくない結果をもたらす。部下の仕事の分担を決めるのはスティーブンス自身であるが、その中で老スティーブンスが割り当てられた仕事量の不合理性は、他人から見ても明らかなものである。ミス・ケントンはこの件について、*‘I believe there are many duties your father should now be relieved of.’* (62) と述べた。彼女はさらに証拠として、老スティーブンスが重い食器を持っていた時に手が震えていたこと、そして料理を運ぶ時に鼻水を垂らしていたことなどを挙げた。しかしスティーブンスはミス・ケントンのアドバイスを受け入れなかった。老スティーブンスが倒れた後、ダーリントン卿は老スティーブンスが過労の兆しを示していたかどうかについてスティーブンスに聞く。この時スティーブンスはこの問題を直接的に答えることを避け、まるでミス・ケントンの話を忘れたように、父は万全な状態に回復したと答える。

これらのスティーブンスの反応を見ると、父の疲れに気づいてやれないばかりか、それを指摘されても聞き入れない彼は、まさに Vorda が考えた *‘a piece of cardboard without any identity or feelings’* (*Conversations* 87) のような人間である。ただし、「偉大な父」への崇拝という強い思いを考慮に入れると、スティーブンスの行動の動機は、単純に彼の鈍感さだけで解釈できない。仮にスティーブンスが本当に仕事に集中しすぎて現実生活に鈍感になってしまったとしたら、眠ってる父に向かって *‘It’s exhaustion that’s made him ill.’* (82) という正鵠を射た言葉を言えるはずがない。息子としてのスティーブンスが口にしたこの一言は、執事としてのスティーブンスが言えない部分をはっきりと示している。つまり晩年に入った老スティーブンスの仕事能力の衰退、そしてその仕事能力には重すぎる負担こそ彼を死に追い込んだ原因であったことをスティーブンスが認識していなかったわけではない。メレディス医師がスティーブンスに話した *‘There was nothing in the world you could have done to save him.’* (114) という慰めの言葉は、自分の行いが父の死を早めたのではないかという疑いを持っていた彼にとって、救いの言葉に聞こえただろう。スティーブンスが頑なに父の仕事を減らそうとしなかったのは、もちろん父の死を早めたいとい

う動機によるものではない。むしろこれは、スティーブンス自身と父親の双方が納得できる唯一の道である。スティーブンスにとって、執事ではなくなり、仕事をしなくなった父は、とても彼が考える「偉大な執事」とは言い難い。そのためスティーブンスは、老スティーブンスの仕事量を減らすようにというダーリントン卿の暗示を何度も無視し、卿も本音を隠さずに「彼の仕事内容を考え直しなさい」と命令するしかなかったのである。⁴それだけでなく、スティーブンスは削減された仕事内容の一覧表を父に手渡すことに抵抗感を覚え、最終的にそれを父のベッドに置いた。一覧表を手渡すことはある種の儀式であり、父を「偉大な父」の幻影から現実世界に引きずり降ろし、父の衰えを自らの手で承認したようなものである。この儀式を避けることから、父を直接的に否定することから逃れたいというスティーブンスの思いが読み取られる。

周りに流されずに、冷静に振る舞うことを‘dignity’と呼び、それに徹することを目標としたスティーブンスだが、父親に関する場面では子供のような一面を見せている。ミス・ケントンに追い詰められた時のスティーブンスの言葉遣いはかなり乱暴なものとなる。⁵執事の目標としての‘good accent and command of language’ (176) を忘れてしまい、父の権威が疑われたことに過剰に反応するスティーブンスは、中年の執事より父を誇りたい幼い子供に近い。しかし多くの場合、この子供心は執事としての巧みな話し方の陰に隠され、読者に悟られないようになっていると考えられる。例えばスティーブンスは一度偉大な執事の基準を「土地持ちの貴族に仕えること」から「道徳的に優れた人物に仕えること」に修正した。新しい社会状況に順応するという名目で行われたこの修正の裏にも、父の存在が考えられる。なぜならば、この修正は父の死の直後に行われたものだからである。スティーブンスは自分の論点を証明するために、偉大な執事である Mr Marshall と Mr Lane の過去の雇い主を‘gentlemen of indisputable moral stature’ (123) と言い換えたが、実際に彼らの身分 (Lord Wakeling, Lord Camberley, Sir Leonard Gray) を見ると、中産階級に属する人物は一人もいない。ここで、老スティーブンスが執事として 15 年間仕えていた Mr John Silvers は、勲位を持たない実業家であったことを振り返って見なければならない。身分の高い家庭に仕えたことがなければ偉大な執事として数えられないとしたら、老スティーブンスが偉大な執事の列から外されることになりかねない。さらに、貴族であるダーリントン卿の下で働いていたスティーブンスが、「品格の化身」としての父を超えてしまうことになってしまう。自分の執事論が矛盾してしまうこと、そして何よりも崇拝する「父」を超えたと明言することをスティーブンスは避けなければならない。スティーブンスの「父」への崇拝は、直接的な表現だけでなく、間接的な側面にまで浸透しており、厳密な構成を持つ心理なのである。

2. 「父」からの継承

前章で述べてきたように、スティーブンスは直接的な方法と間接的な方法とを共に用いて、多くの場面で父への崇拝を暗示している。崇拝の感情の影響で、家族としての父が背景に後退し、完璧な執事としての「父」だけが肥大化するようになったのである。父を‘embodiment of dignity’ (68) と呼んだ時点で、スティーブンスはすでに父のイメージと人生の目標を一体化したと考えられる。彼が父の存在を継承していることは、両者の姿の間にしばしば見られる共通点によって示されている。また、人生の大きな節目でスティーブンスが下した選択においても、父のエピソードから得られた信条の影が見出される。

父の人生を観察してきたスティーブンスは、読者に対して彼の執事としての円熟期の二つのハイライトを示している。ドライブの途中で雇い主を侮辱する客に立ち向かう「ドライブ事件」と、怒りを抑えながら兵士だった息子を死なせた無能な将軍にサービスを提供した「将軍事件」である。この二つの事件を老スティーブンスが何回も息子に話した、虎を冷静に射殺し主人に報告する執事の物語と合わせて読むと、そこからある傾向が読み取れる。虎の事件では冷静さが評価され、中立的な立場のメッセージが伝えられたが、「ドライブ事件」と「将軍事件」には、大きな対立が見受けられる。自身の気持ちより雇い主の名誉を重視し、私情より主人の立場を重んじるという父から継承した信条をスティーブンスが最も明確に実践したのは、ユダヤ人メイドの解雇事件であると考えられる。ユダヤ人メイドの解雇を巡り、ポストコロニアリズムや職業規範などの様々な視点からの研究が行われてきたが (Atkinson; O’Brien)、家族の視点からの考察がまだ行われていない。スティーブンスはミス・ケントンにユダヤ人メイドの解雇を言い渡す際の心境を以下のように述べている。

Indeed, the maids had been perfectly satisfactory employees and – I may as well say this since the Jewish issue has become so sensitive of late – my every instinct opposed the idea of their dismissal. Nevertheless, my duty in this instance was quite clear, and as I saw it, there was nothing to be gained at all in irresponsibly displaying such personal doubts. It was a difficult task, but as such, one that demanded to be carried out with dignity. (156)

上の記述を見ると、ユダヤ人メイド解雇事件は「将軍事件」と同じ構造をしていることがわかる。雇い主の希望と自身の感情との間の対立に直面せざるを得ない状

況に、スティーブンス父子がそれぞれ置かれ、同じ選択を行ったが、それぞれの選択が行われる際に考慮に入れられる要素には違いが存在する。老スティーブンスが将軍にサービスを提供した件では、雇い主の商売上の利益が関係していて、道徳的な側面から考える必要はない。しかし、人種差別という道徳的な問題に対して、スティーブンスの決定には道徳の視点からの思考が含まれず、自分の気持ちを押し殺すという信条に従うべきであるという考えのみが存在する。両者の決定的な違いは、ミス・ケントンが強調した‘wrong’ (157) の問題である。‘my every instinct opposed the idea’というところから見ると、スティーブンスは‘right’と‘wrong’の道徳判断ができないとは言い切れない。道徳判断を忠誠心のもとで下したスティーブンスは、道徳の重要性を過小視する盲目的な奉仕者であるという見方 (岩崎 10) には、共感しやすい側面もある。しかし、スティーブンスのこのような思考の成因、とりわけ彼の道徳観念を‘instinct’の段階で留まらせた環境を分析することは、スティーブンスを理解する上では欠かせない。

ここでスティーブンスを‘moral vacuum’ (Quill 220) と批判する前に、まず彼の教育環境について考える必要がある。息子に晩餐の勤務から外されたことを知らされた時、72 歳の老スティーブンスは過去の 54 年間に毎日欠かさず勤務していた事実を述べて抗議する。つまり、老スティーブンスは 18 歳の時から使用人として働き始め、スティーブンスが生まれたのはその後のことなのである。老スティーブンスの家庭生活は決して円満なものとは言えない。彼の妻への言及は一切なく、長男も南アフリカ戦争で戦死している。老スティーブンスにとって、次男スティーブンスは唯一の家族なのだ。親子二人が支えあって生きる上では、強い絆が生まれるはずだが、実のところ親子間の会話が非常に少なく、その数少ないコミュニケーションもほぼ仕事の話に限られている。老スティーブンスはスティーブンス自身が述べた ‘for some years my father and I had tended – for some reason I have never really fathomed – to converse less and less.’ (66) という言葉から分かるように、息子の教育者としての役割を果たしていない。この点について老スティーブンス自身も意識していたことは、彼の死の直前の言葉から知ることができる (101)。自分は「良い父親にならなかったかもしれない」と言い、その表情が‘irritated’と表現されていることから、老スティーブンスは、息子に何も与えられなかった自分への悔恨を表していると言えるのではないだろうか。スティーブンスの教育は執事としての‘should’と‘shan’t’に偏っており、‘right’と‘wrong’の判断基準を含め、人間としての基礎的な教養がそこから欠落していると考えられる。スティーブンスは父から何かを継承する前に、何も教えられなかった状況になってしまったことに注目しなければ、彼への評価が偏ったものになりかねない。

父からの教えの少なさを論じる時、スティーブンスが誇らし気に語った「ドライブ事件」と「将軍事件」でさえ、父から直接聞いた話ではないと推測できる。前者はダーリントン邸の客人に教えられた話であるのに対して、後者の出所は曖昧であり、老スティーブンスが自分の心境を長々と息子に話す可能性が極めて低いため、この事件はやはり第三者を通じてスティーブンスの耳に入ったものとして考えた方が妥当であろう。スティーブンスは‘both of which I have had corroborated and believe to be accurate’ (43) と強調しているが、情報源となる客人が提供できるのは父の客観的行動のみで、彼自身と父との間の交流がほぼ行われていないのだから、道徳的立場を含めた父の人生観についてスティーブンスは無知であると言わねばならない。にもかかわらず、「将軍事件」では父の思考過程が細かく書かれているが、そこから聞こえるのは老スティーブンスという一個人の生の声より、むしろ息子のスティーブンスが父に投影した「偉大な執事」の声である。つまり、確かにスティーブンスが継承しようとしたのは父親の偉大さではあるが、その父親本人についての理解ができていないため、実際の継承対象は現実世界の父からかけ離れた、実体のない「偉大さ」になってしまっているのである。Parkes はスティーブンスの人生目標について、‘an ultimately vain pursuit of the meaning of dignity’ (43) と述べている。父の心理について知る由もなく、それでも「偉大な父」を追いかけたいスティーブンスの継承は、初めから失敗を免れない努力であり、父の行動の真似に過ぎない。スティーブンスがダーリントン卿の間違った命令に従うことで‘dignity’を感じ得たのは、父の行動から観察できた信条に合致した行動をしたからである。その信条は不完全なものであり、それに従った自分は人生を虚しいものにしてしまったことを、70代に入ったスティーブンスはウェイマス海岸でようやく認識できたのである。

父が亡くなってもその素顔を分らないものの、父の継承者であると自認するスティーブンスは、自分が達成感を味わった事件を述べる時に、常に空想上の父の視線を意識していた。1923年の国際会議、そして1936年の極秘会議における自分の仕事を述べた直後に、スティーブンスは「自分は父と同等な品格を示しただろう」(“...I did perhaps display, in the face of everything, at least in some modest degree a ‘dignity’ worthy of someone like Mr Marshall - or come to that, my father.”) (115)、「父でも誇りに思えるだろう」(“...I had managed to preserve a ‘dignity in keeping with my position’ - and had done so, moreover, in a manner even my father might have been proud of.”) (238) と述べている。父の誇りになりたいという純粋な思いが何十年も色褪せないまま、その思いを抱き続けたスティーブンスは、永遠の息子であるとも言えるだろう。しかし皮肉なことに、老スティーブンスが実際に息子のことを認め、‘I’m proud of you.’ (101) という肉声を、スティーブンスは聞き逃してしまう。現実を生

きていた父に向き合えることができない彼は、老年に入ってもなお父に認めてもらうことを目標に掲げるという矛盾に陥ってしまった。父から執事としての「品格」、そして感情の抑制を継承しようとしたスティーブンスだが、その仮面の下に隠されたのは、父に褒められたいという欲求が満たされない幼い子供としての素顔なのである。

スティーブンスが自分はまだ父親に認めてもらえていない、父親と同等なほどの執事になっていないと自認する理由のヒントはまた、前述した二つの父のエピソードから得られる。老スティーブンスは自分の名誉が如何に貶められても動じなかったが、雇い主が侮辱されると敢然と無礼な客人を謝らせた。一方スティーブンスは自分の語りの中でダーリントン卿のための弁解をしたものの、現実世界では雇い主を批判する相手に立ち向かうことができなかつただけでなく、ダーリントン卿に仕えていた事実自体をも三回否定した。また、個人の感情を押し殺して雇い主のために不本意な仕事をこなした父に対して、息子のスティーブンスはミス・ケントンとの再会、そして彼女と結ばれるという淡い期待を抱きながら始めた旅を、あたかも雇い主のためのものであるかのように作品の冒頭で述べている。父のエピソードと自分の行為を照らし合わせてみると、スティーブンスはまさに父の反対側に至ってしまった人間であり、父の劣化版と言っても過言ではない。父の‘I’m proud of you.’を最初に聞いた時、スティーブンスがそれを無視したのは、仕事中の自分の仮面を外すことができず、息子としての自分を抑え込んだためであるとすれば、作品の現在での彼がなお父親の「偉大さ」を継承しきれていないように示唆するのは、現実生活の行為に由来する羞恥心が働きかけているからではないだろうか。いつまで経っても父に届くことができないという表現から見ると、スティーブンスは実際に継承の失敗がある程度自覚していたと読み取ることができる。

3. 「父」の反復

偉大な執事としての「父」の背中を追いかけてきたスティーブンスだが、父からの継承が、かえって彼の人生を悲劇に結び付けてしまう。作品の現在時点である1956年では、彼はすでに心身ともに記憶の中の父に近づけている。70代に入ったスティーブンスを見ると、老スティーブンスの人生が反復されたようにも見える。

作品の冒頭でスティーブンスが必死に言い訳を探したのは、仕事の細かいミスが多くなったという問題である。その言い訳は、人手不足の中で他の使用人たちの負担を減らすため、自分に過大な仕事を課したことである。彼はこれを認めた時、次のように述べている

I fear, however, that in my anxiety to win the support of Mrs Clements and the girls, I did not perhaps assess quite as stringently my own limitations; and although my experience and customary caution in such matters prevented my giving myself more than I could actually carry out, I was perhaps negligent over this question of allowing myself a margin. (9)

一見理にかなった弁明のように聞こえるが、その内容は不明瞭である。「自分の能力を正確に評価できなかった」から始まり、その逆の意味を表す「こなせる量以上の仕事を自分に課さなかった」に変わり、また「自分に余裕を残すことを無視したかもしれない」に戻っている。自分の仕事能力を正確に捉えていない部分に漏れなく‘perhaps’を付けているが、‘my experience and customary caution’の部分には何の修飾もつけていないスティーブンスは、自分の過失を述べる箇所を自分の執事としての経験、そして人手不足の状況での犠牲をアピールするものに変えたのである。ここでスティーブンスの言葉から読み取れるのは、父がかつて示した「ミスを自分のせいとして認めない」という特徴である。老スティーブンスは彼の転倒の原因について、以下のように理由づけている。

‘I only fell that time because of those steps. They’re crooked. Seamus should be told to put those right before someone else does the same thing.’

‘Indeed. In any case, may I be assured Father will study that sheet?’

‘Seamus should be told to put those steps right. Certainly before these gentlemen start arriving from Europe.’

‘Indeed. Well, Father, good morning.’ (69)

自分の衰えを認めないと言わんばかりに、老スティーブンスは自分が転んだのは階段の整備が行き届いていないからであると言い続けている。また、老スティーブンスはミス・ケントンが見たように、転倒した場所で行ったり来たりして自分の健康さを証明しようとし、「落ちた宝石を探しているように」(“...as though he hoped to find some precious jewel he had dropped there”) (46) 階段を見つめている。彼は自分の仕事能力に問題のないこと、そして転倒したところで階段が歪んでいるという証拠を見つけたがっているのだろう。しかしこの試みが報われないまま、老スティーブンスは己の老いという現実と直面した。実際、作品の最後になって読者はようやくスティーブンスの年齢による仕事能力の衰えを知ることになるが、冒頭でのスティーブンスはむしろ執事としての自分を誇示し、作品中では自分の見事な仕事ぶり

を見せる努力をすることによって、仕事ができなくなった現実から徹底的に逃避する姿勢を見せている。スティーブンスのこのような現実逃避は、父のミスへの対応を目の当たりにしたことに由来している可能性が十分考えられる。しかし現実逃避にも限界があり、スティーブンスは逃げ回ったあげく、細かいミスの意味を前から分かっていたということを、ウェイマスで出会った男性に打ち明けた。⁶新井はこの時スティーブンスが具体的に何を念頭に置いたかについて、自分はすでに執事としての仕事能力を喪失してしまい、そのうちに大きなミスを犯してしまうと主張している（282）。しかしここでは老スティーブンスが細かいミスを重ねるようになり、その後一年も経たないうちに亡くなったこともスティーブンスの思考に入っていたのではないか。執事生涯の最高の15年間を Mr John Silvers に捧げた老スティーブンスの姿と、「自分のすべてをダーリントン卿に捧げた」（“I’ve given what I had to give. I gave it all to Lord Darlington”）（255）と述べたスティーブンスの姿が、スティーブンスの告白の中で自然に重なる。スティーブンスは気づいていないが、老スティーブンスの死から細かいミスの持つ意味を知った読者には、ダーリントン邸に戻る彼の最期を予測することは難しくないであろう。スティーブンスの語りが終わった後に予想できる彼自身の死は、父が行った現実逃避と証拠探しの続きとなり、父の人生を最後まで再現することになる。

意識的な模倣の産物ではないが、スティーブンスの執務室は知らず知らずのうちに父の部屋の複製品に見えてくる。老スティーブンスが亡くなった部屋は彼の寝室で、スティーブンスはこの部屋の特徴として‘smallness’と‘starkness’を挙げ、‘prison cell’のような部屋だと述べている（67）。一方スティーブンス自身の部屋もこれと似たような構造をしている。ミス・ケントンがスティーブンスの部屋に花を飾ろうとした際に、彼の部屋を‘dark and cold’⁷と形容している。また、‘more sun doesn’t get in here’⁸と‘walls are even a little damp’（54）という形容は、いかにも監獄のような場所を暗示している。また、‘prison cell’の表現は、作品の後半にミス・ケントンがスティーブンスの部屋を形容する時に用いられる（‘Really, Mr Stevens, this room resembles a prison cell.’）（174）。牢屋を想起させる二つ部屋の特徴は、牢屋に入れられたようなスティーブンス親子の人生の単調で人間的な温もりを表せない基調に合致しているように見える。

‘prison cell’のイメージは、現実世界のスティーブンスの部屋だけでなく、彼の精神世界にも浸透している。ダーリントン邸以外の世界に足を踏み入れることのないスティーブンスは、執事としての本分を果たしながらイングランドの風土をよく知っていると自認しているが、外の世界に属するファラディ氏からすると彼はむしろダーリントン邸の囚人に見えるのではないか。⁷スティーブンスは「偉大な父」の背

中を追うことという精神的な監獄と、ダーリントン邸という物理的な監獄に二重に閉じ込められる。外の世界に旅立ち、ミス・ケントンに再会することで、彼はようやく自分の人生の空虚さに直面せざるを得なかったのである。スティーブンスの人生は父の人生の反復のように見えるが、実際にスティーブンスの精神世界は父のそれよりも荒涼とした場所である。老スティーブンスは生涯に渡って家族愛を抑圧してきたが、人生の最後に親としての感情に浸る一時を味わうことができた。これに比べて、生涯独身のスティーブンスには家族愛を語る相手すらいない。つまり、老スティーブンスが人生の最後に味わったのが息子への愛を表せなかった後悔であるならば、スティーブンスが旅の最後に直面したのは、まさに自分の人生の「無」であると言える。

また、老スティーブンスの死の場面はスティーブンスを待ち受けている人生の終幕を予言しているように読み取れる。第二節で論じたように、老スティーブンスの死は彼に課された多すぎた仕事と深くつながっている。しかしスティーブンスはまるで父の死をもたらした過重労働を忘れたかのように、作品の冒頭で自分にも過度な仕事を課すことになった。このような角度から考えると、スティーブンスが作品の結末で自分に「ジョークを上達させる」という仕事を課したのは、実に不合理である。家族に囲まれるミス・ケントンの幸福な晩年生活の展望を知り、晩年こそ人生の一番楽しめる時間だと見知らぬ男性から諭されたスティーブンスだが、自分の仕事を減らすことによって、真の意味で人生を楽しむことに思い至らなかった。過労でミスを犯しても決して休まないというのも、老スティーブンスが歩んだ道である。老スティーブンスは転倒した後、医者から「過労かもしれない」と教えられたが、すぐに元の量の仕事に取り組んだ。ダーリントン卿から仕事を減らす命令を受けても、老スティーブンスは台車を使って運搬の作業をやめることをしなかった。人生の夕暮れを楽しめるというアドバイスを受けても、仕事以外の生き方を知らないスティーブンスには、そもそも父の人生を繰り返す以外の選択肢がないということが明白である。

様々な点で父の人生を反復してきたスティーブンスだが、父の人生にある決定的に複製できない部分が存在している。父の人生を完全に再現するには、「偉大さ」を引く継いでくれる人物、即ち以前の自分自身のような人間が必要となってくる。実際にスティーブンスは使用人の世界に入り、やがて一人前の執事として働き始めるが、その背後に常に間接的な指導役である老スティーブンスがいる。しかしミス・ケントンを失ったスティーブンスは、家族を持つ機会を永遠に失ってしまう。そのため、わが子を持ち、自分の父がしたように、自分の生きた証を子供に語る欲求も実現不可能なものになる。前章で論じた通り、スティーブンスが読者に示した父の

二つのエピソードは、直接父から聞いたわけではなく、ダーリントン邸を訪れる他の人物から聞いたものである。ところが雇い主がダーリントン卿からファラディ氏に代わるにより、ダーリントン邸に客人が来ることが一気に少なくなる。自分の人生を伝える手段と相手の両方に恵まれないスティーブンスが、自らの仕事ぶりを伝えるこの物語は、まさに彼の充たされ得ない欲求の捌け口となっている。

結び

多くのテーマが含まれる『日の名残り』という作品の中で、「父」に関する部分は作品の背景の一部として重視されることは稀である。しかし実のところ、スティーブンスは父親の影から完全に解放されていない。そして父の偉大さをスティーブンスは力説したが、父の弱点を読者から隠しきることはできなかった。息子の目に映った老スティーブンスの理想的な姿から彼の実像への変化は、あたかもスティーブンス自身の人生の流れを暗示したものであると言える。老スティーブンスは作品の半分も達していないところで亡くなるが、息子の物語の随所に彼の影響が見られる。スティーブンスの人生が父への崇拜、継承、そして父の人生の繰返しに費やされたことを鑑みると、「父」の表象は『日の名残り』の重要なテーマとして指摘できる。

イングリッド作品の中での「父」の登場はかなり頻繁であり、その都度作品内の重要な要素となっている。これらの「父」たちはしばしば子供の反抗の矛先となるが、『日の名残り』の老スティーブンスはこの構図から逸脱している。スティーブンスは父を尊敬し、その尊敬の共有を読者にも求めるが、己と向き合えず、家族や愛する人と話し合うことすらできないこの父子に対して読者が抱く最も強い感情は、果たして尊敬だと言えるだろうか。老スティーブンスは死の直前によりやく息子を褒めることができ、父親らしい父親になれなかったことへの後悔を告白した。ただし彼は最後まで疲れた目で自分の手を凝視し、息子と目を合わせなかった。スティーブンスも父の死による哀しみを抑えきれず、他人の目の前では涙を見せてしまったが、父の目の前で家族愛を伝えることは一度もなかった。人生の黄昏に至り、ようやく完璧な執事になり得なかった自分に気づき、人生を虚しいものにしてしまったことへの後悔を吐露したのである。ただし最後に彼が得た結論は、ジョークに上達することで、本心からの交流に程遠いものである。スティーブンス父子の荒涼たる精神世界の原点は、父親の不在よりむしろ交流の不在であろう。スティーブンスが父を誇る、崇拜するという強烈な正の感情の反面には、生身の父と家族同士として

話し合えない哀しみが潜んでいると考える。『日の名残り』に既に「父親の反復としての子供」というテーマの萌芽が部分的に現れていると考えられ、長編四作目の『充たされざる者』では自分の未来を象徴する父親、そして自分の過去を象徴する息子の両方が描かれ、このテーマは完全に示されることになる。今後、このテーマに主眼を置き、作品ごとに発展していくプロセスをさらに追跡していきたい。

注

1 テキストとして Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day* (London: Faber and Faber, 1999)を用い、引用にあたっては括弧内にページ数のみ記す。

2 イシグロによるこの種の言及については、Francois Gallix "Kazuo Ishiguro: The Sorbonne Lecture" (150)、A.Vorda and K. Herzinger "An Interview with Kazuo Ishiguro" (66) 参照。

3 ミス・ケントンから'Mr Stevens, will you kindly look at the Chinaman behind you?'と指摘されたとき、ステューブンスは父の過失を部分的に認めたが('If it is so important to you, Miss Kenton, I will allow that the Chinaman behind me may well be incorrectly situated....'), 実際にミス・ケントンの言う通りにしなかったと考えられる。

4 この場面は(p.65)で、ダーリントン卿は国際会議の重要性、老ステューブンスがミスをするものの可能性とその悪影響を繰り返し強調するが、ステューブンスはただ'Indeed not, sir.' 'Yes, sir.'などと答え、卿の真意を汲まない姿勢を卿に命令されるまで貫く。ダーリントン卿の小さな癖まで鋭く気づくことができるステューブンスにしては、卿の言葉の意味を理解できなかったとは想像しづらい。

5 ステューブンスの乱暴な言葉遣いとして、'I would have thought it obvious to anyone with eyes, Miss Kenton.' (56) 'Miss Kenton, you are being quite ridiculous....' (61) 'Miss Kenton, you are merely making yourself look foolish.' (62) などが挙げられる。

6 'More and more errors are appearing in my work. Quite trivial in themselves - at least so far. But they're of the sort I would never have made before, and I know what they signify.' (255)

7 'You fellows, you're always locked up in these big houses helping out, how do you ever get to see around this beautiful country of yours?' (4) の一文で、フェアディ氏は監獄を連想させる'locked up'という表現をそのまま使っていた。

参考文献

Atkinson, Rob. "How the Butler Was Made to Do It: The Perverted Professionalism of *The Remains of the Day*." *The Yale Law Journal*, 105.1. 1995.177-220.

Ionescu, Andreea. "The Descent of the Japanese Patriarch: From History to Literary Representations." *Cultural Intertexts*, 1.1.2014. 58-67.

Ishiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*, London: Faber and Faber, 1999.

———. *Conversations with Kazuo Ishiguro*. Ed. Brian W. Shaffer and Cynthia F. Wong. Univ. Press of Mississippi, 2008.

Lewis, Barry. *Kazuo Ishiguro*, Manchester and New York: Manchester UP, 2000.

-
- O'Brien, S. "Serving a New World Order: Postcolonial Politics in Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day*". *Modern Fiction Studies*, 42.4. 1996. 787-806.
- Parkes, Adam. *Kazuo Ishiguro's The Remains of the Day: A Reader's Guide*. NY: Continuum, 2001.
- Phelan, James, and Mary Patricia Martin. "The Lessons of 'Weymouth': Homodiegesis, Unreliability, Ethics, and *The Remains of the Day*." Ed. David Herman. *Narratologies: New Perspectives on Narrative Analysis*. Columbus: Ohio State UP. 1999.88-109.
- Quill, Lawrence. "Ethical conduct and public service: Loyalty intelligently bestowed." *The American Review of Public Administration* 39.3. 2009.215-24.
- Sim, Wai-chew. *Globalisation and Dislocation in the Novels of Kazuo Ishiguro*. Diss. U of Warwick, 2002.
- Taketomi, Ria. "'Father' in Kazuo Ishiguro's Novels: A Comparison of a Father-and-Child Relationship and Grandfather-and-Grandchild Relationship Focusing on the *Unconsoled*." *Comparatio*, 19. 2015. 4-17.
- Wong, Cynthia. *Kazuo Ishiguro: Writers and Their Work*. Horndon: Northcote, 2005.
- 新井英夫. 「カズオ・イシグロ 『日の名残り』 における自己物語: なぜステイプルスは旅に出たのか。」 *松山大学論集* 29.1. 2017. 273-98.
- 岩崎雅之. 「老執事の笑えぬ冗談: 『日の名残り』 の深淵に見る倫理的問い。」 *福岡大学人文論叢* 50.4. 2019.1015-29.
- 平井杏子. 『カズオ・イシグロ: 境界のない世界』 水声社、2017 年

The Butler as a Father's Son
---An Analysis on the Father-son Relationship in *The Remains of the Day*

XIAO Yiqun

Abstract: Being discussed through multiple lenses, Kazuo Ishiguro's third novel *The Remains of the Day* is yet to be rediscovered thoroughly from a father-son relationship perspective, as this paper attempts to achieve. By illustrating the narrator Stevens' worship towards his father, his botched effort to inherit his father's legacy which leads to his becoming a tragic replica of his father, this paper clarifies the state of Stevens, a man in his seventies with a long career, as a person detained in an everlasting childhood and imprisoned both physically and psychologically. While observing the limited and indirect communication between Stevens and his father, this paper tries to penetrate the awkwardness in these occasions to reveal the hidden feelings behind the malfunctioning discourses. Finally, this paper introduces new questions for further discussion, namely the theme of 'children as their fathers' life repeated' and its appearance in Ishiguro's other works, based on the brief analysis in relation to which is conducted on *The Remains of the Day* in this paper.